

2014/2015 平成26年度

第3次安倍政権が発足。消費税8%がスタートした。ソチで開かれたオリンピック・パラリンピック、ブラジルで開かれたFIFAワールドカップでの日本選手・チームの活躍に加え、全米オープンテニスでの錦織圭選手の準優勝が大きな話題となった。スポーツ行政の一元化やスポーツ庁創設に向けた議論も進捗した。

スポーツチャレンジ助成事業

ソチオリンピックには2人のOBチャレンジャーが出場したほか、リオオリンピックでメダルの獲得を目指すカヌー・スラロームの羽根田卓也選手が、韓国・仁川で開かれたアジア大会で優勝を飾った。3月に開催した第8回スポーツチャレンジャーズ・ミーティングでは、体験1期生のアドベンチャーレーサー・田中正人氏と、「日本百名山ひと筆書き」の田中陽希氏が特別講演を行った。



■平成26年度(第8期生)助成概要

	申請数	採択件数	助成金額
体験助成	44件	14件	1,326万755円
研究助成	54件	14件	1,306万8,000円
奨学生	16件	4件	480万円(1年分)
計	114件	32件	3,112万8,755円

スポーツ振興支援事業

■ジュニアヨットスクール葉山

10月19日に開催した保護者会では、保護者の皆さんが観覧艇から海上練習や模擬レースを見守ったほか、終了後には懇親のためのバーベキューパーティーを開催した。



■セーリング・チャレンジカップIN浜名湖

従来のOP級、ミニホッパー級、FJ級に加え、新種目として国際420級とレーザー4.7級の5クラスを開催。全国36クラブから102隻・147名の選手が参加した。大会期間中には特別コーチを招いてGPS航跡データの活用法などを学んだ。

■スポーツ教材の提供

「スポーツ機会の充実に向けた新たな取り組みを計画している団体」を対象に募集を行い、928件の申請の中から抽選で125団体にスポーツ教材を提供した。また被災3県から申請のあった53団体に対して、被災状況を個別に確認のうえ、既定の提供枠とは別に被災地支援としての提供を行った。

■全国児童 水辺の風景画コンテスト

全国から9,149点の作品が寄せられ、入選作品510点、入賞作品37点を決定した。入賞作品はジャパンインターナショナルポートショー2015の会場に展示した。

スポーツ文化・啓発事業

■第7回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞



[奨励賞] 妻木 充法 氏
公正なジャッジを支える「鍼治療」の技術



[奨励賞] 門田 正久 氏
障害者アスリートのメディカルサポート環境を拡充する取り組み

■調査研究

平成24年度から取り組んでいる障害者スポーツをテーマにしたシンポジウムを、神戸と東京の2か所で初開催した。シンポジウムでは、海老原修調査研究委員長による「日本のパラリンピック選手強化の課題と現状」の調査報告に続き、パネラーからは「選手の立場からの競技力向上」「各競技団体の現状と課題」「政府や自治体のスポーツ政策」「選手の生活を支える企業のあり方」についての報告が行われ、障害者スポーツ環境の向上及び、世界で活躍するアスリートの育成・支援について活発な意見交換が行われた。



性別・年齢・体力・運動能力・経験等によって競技力に差のつきにくいタグラグビーに着目し、「指導サポート付きタグラグビー教材の提供」をスタート。初年度は静岡県西部地域の小学校5校で実施した

「運動が苦手」という子どもたちに 身体を動かすことの楽しさを、 タグラグビーで!

子どもたちの体力・運動能力の低下について、日本体育協会は「時間・空間・仲間の減少」という3点を大きな原因としてあげ、一方、文部科学省では毎日60分以上身体を動かすことを推奨している。しかし、すべての子どもが外遊びやスポーツを好きなわけではない。YMFSでも、「苦手」「嫌い」と感じる子どもたちがスポーツを好きになるためには? という議論を繰り返してきた。

そこで着目したのが、ラグビーのルールを基本にしたタグラグビーだった。腰に付けた相手のタグを取ることでタックルの代わりとするそのゲームは、まるで「ボールを使った鬼ごっこ」。性別・年齢・体力・運動能力・経験等によって競技力に差のつきにくいタグラグビーの特性を用いて、この年から「指導サポート付きタグラグビー教材の提供(後に「はじめてのタグラグビー教室」に改称)をスタートした。初年度は、静岡県西部地区をモデルエリアに定め、地域の小学校5校(児童283名・教員27名)を対象に実施した。

指導サポートを行うのは、ヤマハ発動機(株)スポーツ推進グループの協力を得て、同社ラグビー部、ヤマハ発動機ジュビロの現役選手やOBたち。3年目の平成28年度には「運動に苦手意識を持つ子どもたちが、タグラグビーを通じて楽しめるようになるか?」を検証するため、教員への指導(1回)と児童への指導(3回)を行い、合わせてアンケート調査を実施した。

「指導の中では、どの子も笑顔でタグラグビーを楽しんでいた」「一つのトライが『僕、スポーツが好き!』というスイッチになることもあるはず」。そう話したのは指導を行った現役ラグビー選手。対象となった小学校の中には、球技大会の種目としてタグラグビーを採用した学校や、校技としてタグラグビーに取り組む学校も現れ始めている。